



※ 東アジアの歴史的・文化的文字を横断検索 「史的・文化データベース連携検索 システム」

奈良文化財研究所では、2018年より文字画像データベースの連携強化にむけて、東アジアや世界の木簡・文字資料に関する字形データを集積している国内外の連携各機関と協議を進め、連携のフレームワーク構築に取り組んできました。その成果として、2020年10月に、機関や国境の壁を越えた連携検索ポータルサイト「史的・文化データベース連携検索システム」(<https://mojiportal.nabunken.go.jp/>) を多言語（英・繁体中・簡体中・韓）にて公開しました。

本連携サイトで検索対象となる字形データは、連携各機関が専門研究を進める上で集積したもので、地域は中国・日本を覆い、時代は紀元前後から19世紀におよびます。データ総数はおよそ150万件に達し、東アジア漢字文化圏で最大の文字コレクションです。

本連携サイトでは、相互運用性が確保された国際オープンデータ規格IIIF (International Image Interoperability Framework) を採用し、画像表示における高い汎用性・操作性を実現しました。また、本サイトを通じて発信される情報は、すべてオープンデータを原則としており、ユーザーは出典を明記す

るだけで自由にデータを二次利用できます。

本プロジェクトでは、オープンデータ環境を前提とした条件のもと、なるべく多くの組織・機関の参加を仰ぐことで、フレキシブルな連携検索用ポータルサイトを目指しました。この連携の基本理念およびデータ形式はサイト上で公開しています。

さらに国際的な利便性向上のため、日本・中国・台湾からそれぞれの言語で検索しても同様の結果が表示されるように、異体字処理機能を実装しています。例えば、簡体字体「县」を入力した場合、検索結果には常用字体「県」と繁体字体「縣」のデータが表示されます。このような本サイトの諸機能は、連携機関の協力により開発したもので、システム設計書とともにサイト上で公開（日本語・英語）し、アジア圏だけでなく、欧米圏の機関・データ連携にむけて、積極的な情報公開に努めています。

本サイトの公開は、人文学の研究基盤を一層強化するだけでなく、文字のもつ多様な魅力を広く社会一般に示すものになると確信しています。今後は、国際的な連携の拡大、検索対象となる字形の質・量の拡張を図るとともに、サイト機能の多様化・高度化に挑み、学術資源としての文字画像データの有用性を発信していきます。

ぜひ一度サイトにアクセスいただき、文字の歴史に触れてください。（都城発掘調査部 畑野 吉則）

史的・文化データベース連携検索システム

奈良文化財研究所

HNG

史的・文化データベース連携検索システム

「國」字の検索結果一覧

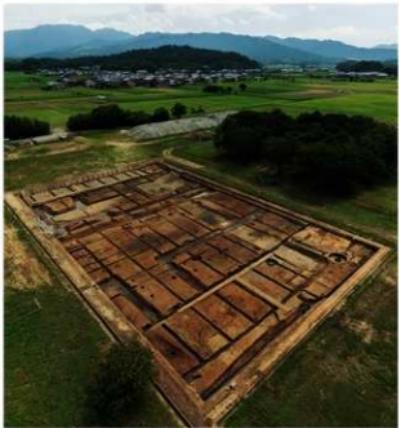


発掘調査の概要

藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第208次)

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区では、近年、藤原宮中枢部の様相をあきらかにするため、大極殿院の調査を継続的におこなっています。前号でお伝えしたように、大極殿院は大極殿の後方を画する大極殿後方東回廊・西回廊によって南北二つの空間に分割されます。このうち北側の空間には、前期難波宮内裏後殿に相当する建物が存在した可能性が指摘されており、今年度はこの建物の有無を改めて検討することを主目的として、大極殿の北方を広く調査しました。

調査の結果、大極殿後方回廊から大極殿院北面回廊までの範囲では、基壇や礎石据付痕跡といった明確な建物の痕跡はみつかりませんでした。また、藤原宮の造営時には基壇の周囲に排水溝をめぐらせることが通例となっていますが、同範囲ではこうした排水溝もみつかりませんでした。さらに、遺存状態は良くないものの、礎を敷いて空間を整備していることを確認しました。こうした状況から、回廊に囲まれた空間には前期難波宮内裏後殿に相当する建物ではなく、その造営にも着手していない可能性が高まりました。建物を配置する計画はあったものの、最終的に着手にいたらなかったことも考えられますが、この空白地の性格については現在も検討を深めているところです。



調査区全景(北西から、香具山を望む)

いっぽうで、調査区の東南部と西南部のそれぞれにおいて、大極殿後方東回廊・西回廊よりも北に張り出す基壇の積み土と、それをとりまく基壇造成時の排水溝を検出しました。特に西南部では基壇土の遺存状態が良く、版築状に土が積まれた状況を確認しました。このことから、両回廊の間に、回廊よりも梁行の広い基壇建物があった可能性が浮上しました。ただし、今回検出した範囲では、明確な礎石の据付痕跡や抜取痕跡は確認できており、今後の調査で建物の有無を改めて検討する必要があります。

以上に記したように、今回の調査では、大極殿院を構成する空間のうち北側については最終的に空白地であった可能性、そして大極殿後方回廊の中央に回廊よりも梁行の広い基壇建物があった可能性を提示しました。いずれも、藤原宮を含む古代都城の造営過程や構造、変遷を考える上で重要な成果と考えられます。

また、前号でお伝えしたように、今回の調査区の多くが1977年度に実施した藤原宮第20次調査の範囲と重複しています。第20次調査は、奈文研による大極殿院の最初の調査であると同時に、藤原宮の造営開始が天武朝末年頃に遡りうることを示唆した、学史上重要な調査として知られます。この調査で検出した遺構面に触れ、再精査できたことも、今回の調査の醍醐味の一つとなりました。

10月2日には現地見学会を開催し、600名を超える方々に調査成果をご覧いただきました。コロナ禍の中お越しください、ありがとうございました。現在は埋戻しを終え、本調査の整理作業を進めつつあります。今回の調査からもあきらかなように、藤原宮には解明すべき課題が多く残されています。そうした課題に取り組むべく、今後も調査を続けていきますので、どうぞ期待ください。

(都城発掘調査部 岩永 琦)



版築状の基壇の積み土(調査区西南部、東から)

興福寺東金堂院の調査(平城第640次北区)

興福寺は、藤原不比等が奈良時代はじめに平城京左京三条七坊の地に建立した藤原氏の氏寺であり、南都七大寺の一つです。度重なる火災に遭いながらも、堂塔は創建期の規模で再建が繰り返され、伽藍の復興がなされてきました。しかし、享保2年(1717)の被災後は、創建期の復興が叶っていませんでした。現在、興福寺では『興福寺境内整備構想』(1998)にもとづき、寺觀の復元・整備を進めています。奈文研は、そのための発掘調査を継続的に実施しており、今回の調査もその一環です。

今回の調査は、東金堂の西正面に聞く門とそれを取り付く回廊の基壇や建物の確認、およびその規模・構造等をあきらかにすることを目的に、2021年7月13日から11月4日にかけて実施しました。調査区は、想定される門の全体と、回廊の一部を含む、南北20m、東西13mです(260m²)。

東金堂院は、東金堂と五重塔を回廊と築地塀で取り囲んでいたとみられ、北面と西面が礎石建ちの単廊、東面と南面が築地塀と考えられています。東金堂は神亀3年(726)、五重塔は天平2年(730)の創建で、東金堂院の門・回廊も同時期の創建とみられます。創建以後、東金堂と五重塔は5回の火災に遭い、現存する堂塔は応永年間(1394~1428)に相ついで再建されたものです。

今回の調査では、東金堂の西正面に門と回廊の遺構がみつかり、それらの位置と規模があきらかとなりました。すなわち門の全体(南北約11m)と、門の南北に取り付く西面回廊の一部(門の北で南北約8m、門の南で南北約1m)を検出しました。検出した基壇外装と雨落溝は、少なくとも2時期に分け

ることができました。一つは、創建期に遡る可能性のある遺構で(奈良時代)、もう一つは、平家による治承4年(1180)の南都焼討後に再建された遺構です(鎌倉時代)。南都焼討の火災痕跡(焼土)もみつかりました。

興福寺境内の発掘調査で、南都焼討の焼土と、その後に再建した遺構を特定したのは今回が初めてです。焼土の直上で、基壇外装が据えられていることを確認しました。この焼土の中には、完形品の土師器皿等が捨てられており、それらの年代がいずれも平安時代末~鎌倉時代初頭であることから、焼土とその直上の遺構の時期の特定にいたりました。

創建期の遺構は、石組の雨落溝やその抜取溝を検出しました。鎌倉再建期の遺構は、基壇外装(地覆石・羽目石)、階段や雨落溝等を検出し、創建期の位置・規模を踏襲して再建されていることを確認しました。

基壇上面では、礎石の据付穴や根石を検出し、門は桁行30尺(8.8m)の八脚門(桁行3間、梁行2間)で、回廊は梁行12尺(3.6m)の単廊(梁行1間)であることがあきらかになりました。礎石の据付穴は1回分のみ確認でき、現在のところ創建期のものと考えています。

これら(ほか、元禄年間(1688~1704)に植えられたとされる「花の松」や、太平洋戦争中に掘られた爆風除けや水槽等がみつかり、近代にいたるまでの、東金堂西正面の宗教空間の変遷がわかりました。

10月9日には、感染症対策を講じた上で現地見学会を開催し、真夏日の暑い中でしたが、949名の方にお越しいただきました。

(都城発掘調査部 目黒 新悟)



調査区全景(北西から)



南都焼討(1180)頃の遺物を含む焼土と、その直上の基壇外装抜取溝(北から)



ささげものを盛るうつわ 一装飾付須恵器を観察する－

ここにあるのは、高杯形器台と子持器台と呼ばれる須恵器です。

奈文研とゆかりのある、奈良市内の所蔵家がおもちで、昨年所蔵品の年代や考古資料としての価値について相談を受け、調査をおこないました。出土地は不明ですが、考古学的な所見から、どちらも古墳時代後期、横穴式石室への埋葬にともなう葬送儀礼で用いたうつわであると考えられます。ほぼ完全な形である点は、資料的価値が高く、表面を波状文や、長方形や三角形の迷孔で飾る様子も良く観察できます。

特に、子持器台は装飾性の高い須恵器の一つで、「親器」と呼ばれる台の上に、「子器」と呼ばれる、小さなうつわを付けています。この器台の子器は、中央に短頸壺、周間に杯と広口小壺が取り付けます。杯と短頸壺には蓋が付き、蓋をかぶせた状態で焼かれたこともわかりました。

さらに、今回の調査では、高エネルギーX線CTを用いて詳細な観察をおこない、子器と親器の詳細な作り方等を調べることができました。

ただし、残念なことに、うつわの中に入れた痕跡はみつかりませんでした。

奈良県内では、鳥塚古墳で5点の子持器台が出土していますが、出土例はそれほど多くありません。

では、これらはどこで作られ、どの地で使われたのでしょうか。

今後、さらなる分析を進めていきます。

(都城発掘調査部 松永 悅枝)



器台の高さ：高杯形器台（左）約 50 cm

子持器台（右）約 40 cm（蓋をかぶせた状態）



湯舟坂2号墳プロジェクト

近年、遺跡の再発掘や遺物を再整理する事例をみかけるようになりましたが、このプロジェクトは文化財を地域活性化の資源として捉えるものです。

1981年、京都府京丹後市久美浜町に所在する湯舟坂2号墳で発掘調査がおこなわれ、丹後半島最大級の横穴式石室をもつ円墳であることが判明し、金銅装双龍環頭大刀を含む豊富な副葬品が出土しました。その2年後、遺跡は京都府指定史跡、遺物は国の重要文化財となり保護されることになりました。

それから40年。京都府立大学の諫早直人准教授（奈文研客員研究員）主導の本事業が同大地域貢献型特別研究（ACTR）に採択されました。目標は、市教育委員会・府立丹後郷土資料館および地元自治会と協働して最新の研究動向を反映させ、遺跡の新たな価値を見出すことです。私は高精細写真撮影の面で協力し、「正確かつ情報量の多い写真記録」を研究者はもちろん、地元でも利用し易い高品質な遺構・遺物写真として整備するお手伝いをしました。

7月24日、コロナ禍の合間に縫って久美浜庁舎で成果報告会がおこなわれ、広報資料印刷物は区長さんや府立大生がデザインする等、文字通りの協働イベントになりました。4Kディスプレイによる高精細画像解説や大きく引き伸ばした写真パネルを用いた学生解説とともに、私にも「再撮と新撮」のお題で発表の場が与えられ、実物を超えそうな迫力と親しみやすさを両立させる報告会となり、好評でした。

発掘40周年記念事業やさらなる価値発見を目指す調査が今後も計画されていますが、観光目的ではなく現地の方々が地域の魅力を感じられる資源化を目指している点がミソです。文化財が地元で生きて育つよう、最新の研究技術で応える取り組みを続けていきたいと思います。（企画調整部 栗山 雅夫）



巨大な双龍環頭柄頭が目を惹いた写真パネル展示



よみがえった古代のゲーム「かりうち」対戦試合

奈文研では、調査研究の成果を活かし、平城宮跡来訪者に遺跡博物館ならではの体験を提供するための活動をおこなっています。その一つ、古代の遊び「かりうち」を現代のゲームとしてよみがえらせるプロジェクトの始動を「奈文研ニュースNo.80」でお伝えしました。「かりうち」とはサイコロの代わりに4本の棒を投げる双六に似たゲームで、2015年に奈文研の研究により盤面の実物が発見されました。

その後、「かりうち」の道具やルールの検討を重ね、ついにこの秋、2021年11月3日、朱雀門ひろばにて、「よみがえった古代のゲーム「かりうち」対戦試合」を平城宮跡管理センターとの共催、NPO平城宮跡サポートネットワークの協力で実施しました。

一般応募8チームでのトーナメント制とし、試合では、この日のために改良した折り畳み式の板紙による盤面、吉野杉を材料に使ったコマ・「かり」による「かりうち」キットを用いました。さらに、決勝戦では、盤面に出土遺物から再現した土器、木の枝を削り再現した「かり」、コマとしての小石を用い、奈良時代をよりリアルに体験いただきました。

当日は晴天に恵まれ、朱雀門ひろばには奈文研職員・NPOメンバーらが扮する「天平人」も応援にかけつけました。初めての参加チームも飲み込み早く、「おんぶ」や「どんどん返し」等の技を駆使し、時には祈りを込めて「かり」を投げ、試合運びに一喜一憂する声の上がる楽しい時間となりました。

奈文研は今後も「かりうち」をより広く皆様に楽しんでいただくため、取り組みを進めてまいります。引き続きの応援をよろしくお願ひいたします！

（文化遺産部 高橋 知奈津）



朱雀門ひろばの「かりうち」対戦試合の様子

■ 平原1号墓出土の重層ガラス連珠

福岡県糸島市にある平原1号墓から特殊な重層ガラス連珠が886点出土しています。今回、これらのガラス連珠について材質調査を実施した結果、ナトロンと呼ばれる蒸発塩を原料としたソーダガラスで、アンチモンという成分を含むことがわかりました。このような化学組成のガラスは地中海世界で生産されたガラス（ローマガラス）の特徴です。

これらの重層ガラス連珠のうち、1点については過去にも分析報告がなされていましたが、製作技法および化学組成のいずれにおいても日本列島や近隣諸国に類例がなく、起源や流入経路も不明でした。しかし近年、筆者らによる海外調査において、形態的特徴の類似する重層ガラス玉が存在することがあきらかとなりました。一つはモンゴルで、匈奴の墓（ナイマートルゴイ遺跡）から出土しています。もう一例は、文化庁による奈文研とカザフスタン国立博物館の拠点交流事業のなかで、カザフスタン南東部の埋葬遺跡（カルカラ遺跡）から出土していることを確認しました。

そこで、平原1号墓出土品について改めて可搬型の蛍光X線分析装置を用いて非破壊材質調査を実施し、これらの海外資料との比較をおこないました。その結果、類似の化学組成をもつことが確認されたのです。

一連の調査研究により、平原1号墓の重層ガラス連珠は、当時ガラスの一大生産地であった東地中海沿岸地域で生産されたものが、ユーラシア大陸の東西を結ぶ交易路のなかでも北側の「草原の道」を通って運ばれた可能性が示されました。

（都城発掘調査部 田村朋美）



平原1号墓出土重層ガラス連珠（上）
カザフスタン（左下）とモンゴル（右下）の類例

■ 油長酒造（株）と協定書を締結

「風の森」等の銘柄で全国的に知られ、奈良県御所市に所在する油長酒造株式会社と奈文研は、2021年8月に文化財保護と普及啓発に関する協定書を締結しました。これは、奈文研が有する、古代の酒造に関連した様々なコンテンツを生かしつつ、油長酒造が現代の醸造家の視点での酒造りをおこなう等の共同事業を軸に、酒造をキーワードとして、文化財に関する知識や关心の普及啓発を促進しようとするものです。

この協定書の締結を記念し、2021年11月11日には、平城宮跡資料館において研究集会「日本酒と日本料理の過去・現在・未来を考える」を開催しました。菊乃井の堀知佐子氏による「日本料理と日本酒の関係：「サケ」とは神様の食事」、油長酒造の山本長兵衛氏による「風の森を醸す：日本酒の歴史と油長酒造の歩み」、チーズプロフェッショナル協会の坂上あき氏による「未来の食文化をつくるパートナーとしてのチーズ：日本料理への受容・日本酒とのペアリング」、龍谷大学の田邊公一氏による「清酒酵母の歴史を考える」、東京医療保健大学の三舟隆之氏による「古代の食と日本酒」、新潟大学の畠有紀氏による「江戸の物語の中の食と酒：飲食物の擬人化表現をめぐって」、陶芸家の末廣学氏による「食卓を彩る器と酒器」等の講演や、「酒」の文字の墨書きをもつ土器などの出土遺物と酒器を中心とする陶芸作品の展覧がおこなわれ、多分野の専門家の間で活発な意見が交わされました。

今後、奈文研と油長酒造のパートナーシップのもとで、様々な新しい企画を展開していく予定です。ご期待下さい。

（企画調整部 庄田慎矢）



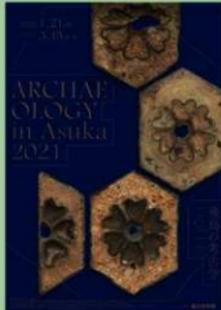
研究集会の様子

令和3年度 飛鳥資料館冬期特別展「飛鳥の考古学2021」

飛鳥・藤原地域では長びくコロナ禍の中でも継続的な発掘調査がおこなわれ、新たな発見や成果が蓄積されています。

飛鳥地域の発掘調査では、三段築成の八角墳である中尾山古墳が注目されます。また、飛鳥京跡苑池では北池の具体的な様相があきらかになりました。そのほか島庄遺跡、大官大寺南方遺跡の調査速報や、近年分析を進めている石神遺跡の土器を展示します。藤原京城に目を向けると、藤原宮大極殿院では、大極殿院東面回廊の規模や構造が確定すると同時に、前期難波宮との共通性や違いが浮き彫りになりました。藤原京左京八条三坊や慈明寺遺跡（藤原京右京四・五条八・九坊）では、藤原京期の遺構に加え、弥生時代の遺構もみつかっています。また、2022年3月、齊明天皇との関連性が指摘される牽牛子塚古墳の整備が完了し、築造当時の八角墳の姿がよみがえります。これを記念して、牽牛子塚古墳にスポットを当ててご紹介します。

この冬は、ぜひ飛鳥の考古学をご堪能ください。 （飛鳥資料館 石田由紀子）



会期：2022年1月21日（金）～3月13日（日）

開館時間：9：00～16：30（入館は16：00まで）／休館日：月曜日（2月6日（日）は無料入館日）

主催：独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 飛鳥資料館・奈良県立橿原考古学研究所・明日香村教育委員会
後援：文化庁・近畿日本鉄道株式会社

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/asuka/> お問合せ：☎ 0744-54-3561

平城宮跡資料館 令和3年度 冬期企画展「発掘された平城2020・2021」

奈良文化財研究所では、平城宮・京跡の発掘調査を継続しておこなっています。その調査成果を皆さんにお届けするために「発掘された平城2020・2021」と題して、2019年度・2020年度におこなった発掘調査成果をご紹介する展示を開催いたします。

今回は、2019年度におこなった調査のうち、平城宮東方官衙地区・第一次大極殿院東方、平城京左京二条二坊十一坪の調査を、2020年度におこなった調査のうち、興福寺境内の調査成果を出土資料と写真パネル等でご紹介します。

また、発掘調査成果のほかに、平城宮出土の竹尺や3次元モデルを活用した平城宮出土唐花文鬼瓦の復元等の最新の調査成果もご紹介します。

この機会に、当研究所の最新の研究に触れていただければ幸いです。

（企画調整部 藤田友香里）

会期：2022年2月11日（金・祝）～3月27日（日）

開館時間：9：00～16：30（入館は16：00まで）／休館日：月曜日（休日の場合は翌平日）

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/>

お問合せ：☎ 0742-30-6753（連携推進課）



興福寺境内の調査区全景（北西から）

■ お知らせ

藤原宮跡資料室 ロビー展示

10月1日（金）～3月31日（木）（予定）

「2020年飛鳥・藤原地区発掘調査速報展」

■ 記録

文化財担当者研修

○遺跡調査技術課程 9月27日～10月1日 10名

○保存科学（木製遺物）課程 10月11日～10月19日 10名

○遺跡GIS課程 11月15日～11月19日 30名

○文化財写真課程 11月22日～12月3日 8名

平城宮跡資料館 秋期特別展

10月9日（土）～11月7日（日） 6,606名

「地下の正倉院展－本簡を科学するⅡ－」

現地見学会

○飛鳥藤原第208次調査（藤原宮大極殿院）

10月2日（土） 619名

○平城第640次調査（興福寺東金堂院の門と回廊）

10月9日（土） 949名

第13回東京講演会

10月23日（土）13：00～16：00

於：有楽町朝日ホール 会場参加 135名

ライブ配信参加 358名

第127回公開講演会

11月13日（土）13：30～16：00

於：平城宮跡資料館講堂 84名

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <https://www.nabunken.go.jp>

Eメール koho_nabunken@nich.go.jp

発行年月 2021年12月